様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 １５ 日現在

機関番号：３４４２８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０３０８０

研究課題名（和文）地域社会における陰陽道および民間信仰の多元的な派生・展開に関する研究

研究課題名（英文）A study on the multidimensional derivation and development of onmyodo and folk beliefs in the community

研究代表者
赤澤　春彦（AKAZAWA, HARUHIKO）

摂南大学・外国語学部・准教授

研究者番号：９０７１０５５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では仏教、神祇、陰陽道といった複数宗教の習合状況を明らかにすることにより、これまで寺院や神社に収斂されがちであった民間の宗教・信仰について新たな宗教史像を明らかにすることを目指した。主に陰陽道的「知」の地域的展開や人々の生活との関連に着目して追究した。また、都市や権力における陰陽道の展開についても追究し、改元、病と物気、陰陽家のイエの形成、宗教テクストの形成などを論点にして検討を進めた。その上で、最終的に中世における陰陽道の展開およびその特質について総体的に論じることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究によって、多元的な信仰が習合した思想の広がりや社会におけるこれらの信仰の役割について、陰陽道的「知」を軸とした見通しを示すことができた。また、これまで漠然と「民間陰陽師」と称されてきた存在について、再検討を提起し、中世と近世をまたぐ信仰の在り方の問題についても改めて考え直さなければならないことを示した。また、改元や暦といった東アジア世界で共通する知識や技術の重要性も改めて確認できた。

研究成果の概要（英文）：In this study, by clarifying the state of religion of multiple religions such as Buddhism, Shinto shrine, and Onmyodo, we will clarify a new image of religious history about folk religions and beliefs that have tended to be converged in temples and shrines. Aimed at. I mainly focused on the regional development of onmyodo-like "knowledge" and its relationship with people's lives. He also pursued the development of the Onmyodo in cities and powers, and proceeded with discussions on issues such as reforms, illness and morale, the formation of the Yin-Yang family's Ye, and the formation of religious texts. After that, I was finally able to discuss the development of the Onmyodo in the Middle Ages and its characteristics as a whole.

研究分野：日本中世史、日本宗教史

キーワード：陰陽道　陰陽師　占術　呪術　陰陽道的「知」　改元　安倍晴明　暦

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

日本宗教史研究において黒田俊雄の顕密体制論が大きな地位を占めているのは衆目の一致する所であろう。しかし、同論には残された課題も多く、大きな論点として、①東アジア世界的視角からの考察、②東国社会との関係、③中世後期への展開、④神祇など仏教や寺院以外の宗教との関係などが挙げられている（黒田俊雄『増補新版 王法と仏法』法蔵館、2001、平雅行解題）。このうち①～③については研究が進展を見せ、④についても神祇研究などが成果を挙げている。また、近年は陰陽道研究が大幅に進展してきており、平安時代は山下克明が村山修一の陰陽道史に再考を促し、鈴木一馨、繁田信一、細井浩志らが貴族社会における陰陽道の役割を具体的に明らかにしている（山下克明『平安時代の宗教文化と陰陽道』岩田書院、1996 年。同『平安時代陰陽道史研究』思文閣出版、2015 年。鈴木一馨『陰陽道』講談社選書メチエ 244、2002 年。繁田信一『陰陽師と貴族社会』吉川弘文館、2004 年など）。中世では院政期から鎌倉期を赤澤が、室町期を木村純子がまとめ、近世陰陽道研究も林淳や梅田千尋を中心に進められ、陰陽道研究の水準は飛躍的に向上している（赤澤『鎌倉期官人陰陽師の研究』吉川弘文館、2011 年。木村純子『室町時代の陰陽道と寺院社会』勉誠出版、2012 年。林淳『近世陰陽道の研究』吉川弘文館、2005 年。梅田千尋『近世陰陽道組織の研究』吉川弘文館、2009 年）。このように陰陽道研究の進捗が著しい現状に鑑みれば、次なる段階としては蓄積の厚い寺院史、神社史と議論を交わし、日本宗教史研究に新たな視座を提供することが求められる。そのためには仏教、神祇、陰陽道といった複数の宗教・思想が習合しあう歴史的・宗教的過程を解明することが必要である。複数の思想がいかに習合してゆくのか、これらの宗教・信仰がどのように地域社会の中で重なり合っていくのかを、歴史資料や民俗資料、考古資料に基づいて具体的に明らかにする必要がある。

２．研究の目的

本研究の目的は以下の３点である。１点目は仏教、神祇、陰陽道といった複数宗教の習合を明らかにすることにより、これまで寺院や神社に収斂されがちであった民間の宗教・信仰について新たな宗教史像を提示する。２点目は多元的な信仰、特に陰陽道的「知」を軸とした思想の地域的な展開や在地の生活との関連について追究する。多元的な信仰が習合した思想がどの範囲でどのような広がりを見せるか、また在地の人々にとっていかなる意味を持ち、受け継がれていくのかについて明らかにする。これらの成果をもとに寺院史や神社史に収斂されない社会と宗教との関係を描き出す。３点目は東アジア世界の視座で位置づける。例えば宇佐はその地理的環境から古代から朝鮮半島や中国の影響を受けてきた地域であるが、東アジア世界で広く展開する道教を分析対象に加えることで日本国内だけではなく、東アジアの枠組みのなかでの位置づけが可能になる。

３．研究の方法

本研究の目的を達成するため、(1)地域に定住して活動を展開する陰陽師の実態を史料に基づき具体的に明らかにする、(2)陰陽道思想やこれに類する民間信仰の地域的展開を考察する、以上２点の課題を設定した。具体的な研究計画としては、①宇佐の膝下荘園に散在する陰陽師村の実態、②宇佐の陰陽師と地域寺社、神職・僧侶との関係、③宇佐および周辺地域における陰陽道に関わる民俗行事、民間伝承、以上３点を中心に調査する。その上で地域社会における陰陽道の展開について考察する。研究方法は、近世の宇佐八幡宮関係の史料、宇佐周辺の在地史料を調査・収集し、あわせて景観調査や聞き取り調査を行う。また、比較対象として播磨国姫路、備中国上原地区、紀伊国日前国懸宮、伊勢国善教寺についても調査を行う。

加えて、暦、改元、占術、呪術といった様々な分析対象をもって、陰陽道的「知」の中世的展開について検討する。

４．研究成果

(1) １年目（2017 年度）

陰陽道の地域的展開を考える対象として主に年号、暦に焦点を据えて研究に取り組んだ。まず、年号については、日本前近代における改元の特質について検討し、改元にさいする陰陽道の役割を史料上から確認した。その結果、①祥瑞・怪異に対する占い、②改元の諸儀式にかかる日次勘申、③甲子・辛酉改元への勘申、④甲子・辛酉改元時に行う海若祭の４つがあることを明らかにした。その中で注目したのが辛酉年・甲子年において革命・革令思想に基づいて行う改元である。国立公文書館内閣文庫、東京大学史料編纂所、宮内庁書陵部などに残る革命革令改元の史料を調査し、10 世紀から 17 世紀前半までの陰陽道と暦道の勘申史料を翻刻・精査し、辛酉革命・甲子革令における陰陽家の役割と特質について考察した。その成果は国立歴史民俗博物館で行われた国際シンポジウム「年号と 東アジアの思想と文化“The Name of Era, a Mirror of the Thought and Culture of East Asia”」（2017 年 10 月 21 日、22 日）において「日本中世における改元と陰陽家」と題して発表した。

次に暦については地方への頒暦のありかた及び地方暦に関わる史料を収集した。主に中世後

期以降、東国や九州には独自の暦が展開していたことはすでに先行研究で明らかにされているが、これらの暦の作成方法、京暦との差異、頒布方法などについて検討するため、時代の枠組みを超えて様々な事例を収集する必要があると考える。本年は尚古集成館において薩摩暦の史料調査を行い、また国立歴史民俗博物館が所蔵する吉川家文書の調査も行った。このほかの研究としては中世における病の治療に陰陽道がどのように関わっていたのかについて検討した。

(2) ２年目（2018 年度）

日本中世における陰陽道の展開を２つの側面から検討した。１つは中世社会における陰陽道の役割である。その具体的な対象として、病とそれに対する陰陽師の行った治療を取り上げた。前近代社会において病は個人の関心が最も高いものであり、人々は病に対して様々な処置を求めたが、おもに医師による投薬・治療、僧による加持・祈祷、そして陰陽師による呪術が病に対する治療行為として行われた。本研究では陰陽師が行った治療行為である陰陽道祭祀について院政期から室町期までを対象に史料を収集し、総体的な 把握を試みた。その結果、院政期から鎌倉中期にかけて「数多く」、「多種多様に」、「多数の陰陽師を動員して」行われるようになること、その中心となったのが五行家系の鬼気祭・土公祭と道教神系の泰山府君祭であり、病状や病因によって執行する祭祀をわけていたこと、さらに 12 世紀末から 13 世紀中頃にかけて密教祈祷を意識した道教星神系の祭祀が盛んに行われるようになること、鎌倉末期以降、急速に減少してゆき、室町期には病に万能の功験を持つ祭祀として泰山府君祭に収斂されてゆくことを明らかにした。また、病因の一つとして考えられていた物気（モノノケ）に対する陰陽道のかかわり方が院政期以降変容することも新たに発見した。

もう１つは中世における安倍晴明伝説の展開についてである。検討の結果、晴明伝承の形成には晴明の５代後胤にあたる安倍泰親の影響が大きいこと、晴明伝承に泰親伝説が上書きされてゆく動向が見て取れること、民間陰陽道の派生、展開を考える上で、15 世紀以降、新たな晴明伝説が形成されてゆくこと、そしてそれは禅宗の教線拡大と関わる可能性があることを指摘した。これらについては４回の研究報告の場で発表した。以上の成果により、中世社会に陰陽道が展開してゆく諸要因について重要な事実を解明することができた。

(3) ３年目（2019 年度）

占い及び占術書を取り上げて検討を進めた。一昨年度、年号や暦の問題、昨年度は病における陰陽道の対処について考察したが、いずれもそれらを行うにあたり、陰陽師は知識的、技術的根拠として家伝の典籍を保持・編纂し、それぞれ「家説」を形成して、それを「イエ」の財産として継承していったことを指摘した。また、それらは時代とともに変容、再構成、再生産されてゆくものであることもわかった。次なる課題は、こうした知識や技術が「イエ」という枠組みを超えて、どのように地域社会に展開してゆくのかという点である。この課題を考えるうえで、新出史料（国立歴史民俗博物館所蔵の吉川家文書「十二星占写」）を検討した。この史料は 16 世紀初頭に畿内で作成されたものであり、陰陽道の占術書に分類されるテクストであるが、様々な宗教的・呪術的「知」を取り込みながら、取捨選択や独自の解釈を織り交ぜた雑書で、こうした「知」の媒介となった畿内の宗教者のネットワークが浮上する重要な史料であることを明らかにした。本史料の分析・考察について、日本宗教学会およびパリ大学（Université de Paris/Paris Diderot-P7）で行われた国際シンポジウム「前近代日本宗教者の実用知―テクスト・テクネ・図像―」で発表した。

(4) ４年目（2020 年度）

新型コロナウイルス感染拡大の影響により調査活動が予定通りに行えなかったが、成果の発表に力を注ぎ、編著（責任編集）を１件、論文を４件、学会報告を１件、報告要旨１件を発表することができた。まず、責任編集を務めた『新陰陽道叢書 第二巻中世』（名著出版、2021 年１月）を刊行できたことは最も大きな成果である。本書はこの 30 年ほどで著しく進んだ陰陽道研究を総括したもので、全五巻（古代、中世、近世、民俗説話、特論）によって構成される。編集にあたって、他の編者や執筆者と頻繁に意見を交わし、最新の研究状況を共有できた点も大きな成果である。中世巻には「中世陰陽道研究の成果と課題」、「院政期・鎌倉期の宿曜道と宿曜師」、「宇佐の陰陽師」の３篇を執筆した。このうち「中世陰陽道研究の成果と課題」は、『陰陽道叢書２中世』（名著出版、1993 年）以降の中世陰陽道研究の総説であり、日本宗教学会第 79 回学術大会（2020 年 9 月 19 日オンライン開催）で発表した成果を加えている。また、「宇佐の陰陽師」は本研究において継続してきた宇佐市・中津市でのフィールドワークの成果の一部である。本研究の重要なテーマである民間信仰および陰陽道的知の派生・展開を考える上で重要な事例であり、従来の「民間陰陽師」という曖昧な概念を再検討し、「地域陰陽師」という概念を新たに提起した。また、中世社会における病と陰陽師の果たした役割についても論究し（「日本中世における病・物気と陰陽道」小山聡子編『前近代日本の病気治療と呪術』 思文閣出版、2020 年４月）、物気に対する陰陽師の役割に新たな知見を加えることができた。

(5) ５年目（2021 年度）

当初は 2020 年度が最終年度であったが、新型コロナウイルスの感染拡大に伴い、調査が充分に行えなかったため延長を申請し、受理された。2021 年度はこれまでの研究を総括するとともに、新たな課題の模索を行った。 研究成果としては、論文３本、研究報告１件、その他の成果１件を発表することができた。まず、陰陽道の歴史的展開および社会への流布を考える上でキーパーソンとなる安倍晴明について「中世における安倍晴明蔵の展開」（林淳編『新陰陽道叢書 第５巻特論』名著出版、2021 年 12 月）としてまとめた。晴明伝説が安倍氏で正統性を主張する根拠として家産の重要な構成要素の１つと見なされていたこと、また、他宗教、とりわけ仏教説話の中で晴明が神格化されたことによって中世以降の陰陽道に新たな晴明伝説が加わるようになることを論じた。本研究課題である陰陽道の多元的な展開において重要な論点を提示することができた。これまでの研究を踏まえて中世における陰陽道の概要を「陰陽道の中世的展開」（『現代思想』49-5、2021 年 4 月）と題し、中世国家と陰陽道、鎌倉幕府と陰陽道、顕密仏教と陰陽道、陰陽道の地域的展開、南北朝内乱・室町幕府と陰陽道、民間陰陽道の展開の６つのテーマを設けて論じた。この他、鎌倉幕府の歴史書『吾妻鏡』にみえる怪異記事を分析した論考（「鎌倉幕府と怪異―『吾妻鏡』の怪異を読む―」共著、東アジア怪異学会編『怪異学 講義―王権・信仰・いとなみ―』勉誠出版、2021 年 4 月）などを発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計11件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 赤澤春彦	４．巻 -
２．論文標題 日本中世における病・物気と陰陽道	５．発行年 2020年
３．雑誌名 小山聡子編『前近代日本の病気治療と呪術』思文閣出版	６．最初と最後の頁 16--190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 赤澤春彦	４．巻 -
２．論文標題 中世陰陽道研究の成果と課題	５．発行年 2021年
３．雑誌名 赤澤春彦編『新陰陽道叢書 第二巻中世』名著出版	６．最初と最後の頁 1--33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 赤澤春彦	４．巻 -
２．論文標題 院政期・鎌倉期の宿曜道と宿曜師	５．発行年 2021年
３．雑誌名 赤澤春彦編『新陰陽道叢書 第二巻中世』名著出版	６．最初と最後の頁 40--445
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 赤澤春彦	４．巻 -
２．論文標題 宇佐の陰陽師	５．発行年 2021年
３．雑誌名 赤澤春彦編『新陰陽道叢書 第二巻中世』名著出版	６．最初と最後の頁 48--512
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 94巻別冊
2．論文標題 陰陽道・陰陽師の中世	5．発行年 2021年
3．雑誌名 『宗教研究』	6．最初と最後の頁 5--51
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 -
2．論文標題 日本中世における改元と陰陽家	5．発行年 2019年
3．雑誌名 水上雅晴編『年号と東アジア―改元の思想と文化』青木書店	6．最初と最後の頁 459-478
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 93巻別冊
2．論文標題 中世陰陽道と占い	5．発行年 2020年
3．雑誌名 『宗教研究』	6．最初と最後の頁 116-117
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 210
2．論文標題 中世社会と暦	5．発行年 2018年
3．雑誌名 歴博	6．最初と最後の頁 8
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 49-5
2．論文標題 陰陽道の中世的展開	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現代思想	6．最初と最後の頁 50-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 -
2．論文標題 中世における安倍晴明像の展開	5．発行年 2021年
3．雑誌名 林淳編『新陰陽道叢書５特論』名著出版	6．最初と最後の頁 71-111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 赤澤春彦	4．巻 -
2．論文標題 鎌倉幕府と怪異―『吾妻鏡』の怪異を読む―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 東アジア怪異学会編『怪異学講義―王権・信仰・いとなみ―』勉誠出版	6．最初と最後の頁 154-170
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　2件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 赤澤春彦
2．発表標題 陰陽道・陰陽師研究の中世
3．学会等名 日本宗教学会第79回学術大会
4．発表年 2020年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 中世陰陽道と占い
３．学会等名 日本宗教学会第78回学術大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 中世後期の占術と陰陽道
３．学会等名 国際シンポジウム「前近代日本宗教者の実用知―テクスト・テクネ・図像―」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 室町期の陰陽道・陰陽師
３．学会等名 国際日本文化研究センター共同研究「応永・永享期文化論 ―「北山文化」「東山文化」という大衆的歴史観のはざまで―」
４．発表年 2019年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 院政期・鎌倉期におけるモノノケ・病気治療と陰陽道
３．学会等名 東アジア恠異学会第118回定例研究会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 日本中世における病・治療と陰陽道
３．学会等名 国際シンポジウム 東アジアの歴史における病気治療と呪術（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 中世における安倍晴明像の再生産
３．学会等名 第6回陰陽道史研究の会
４．発表年 2018年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 安倍晴明伝承の展開と陰陽道の呪術
３．学会等名 2018年度摂南大学国際教養セミナー
４．発表年 2018年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 日本中世における改元と陰陽家
３．学会等名 歴博国際シンポジウム「年号と東アジアの思想と文化」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 赤澤春彦
２．発表標題 『新陰陽道叢書 中世巻』と中世陰陽道研究
３．学会等名 第11回陰陽道史研究の会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計1件

１．著者名 赤澤春彦	４．発行年 2021年
２．出版社 名著出版	５．総ページ数 577
３．書名 新陰陽道叢書 第二巻中世	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
フランス	パリ大学			